０５／１２／１１　　礼拝メッセージ　　土井義広　副牧師

主　　題：私たちに与えられた救い主
聖書箇所：イザヤ書　９章６節

皆さんは、イエス･キリストがどのようなお方かご存じでしょうか？残念ながら、この日本においてはイエス･キリストというお方のことをほとんど知らずにクリスマスが祝われている、というのが現状です。だから、多くの人たちはクリスマスが終わるとすぐに、別の神の所に行って手を合わせるのではないでしょうか。

☆私たちに与えられた救い主とは、どのようなお方なのでしょうか？

いったい、このイエス･キリストとはどのようなお方なのでしょう？なぜ、このように２０００年以上も経った今も、救い主の誕生を世界中の人が祝うのでしょうか？その理由を預言者イザヤは、はっきりと私たちに教えてくれています。それは、私たちが、その与えられたキリスト（＝救い主）という人物がどのようなお方であるのかということを知ることによって分かります。今日は、このイザヤ書９：６から、神が私たちに与えてくださった救い主とは、どのようなお方であられるのかということを学びたいと思います。そうすることによって、このイエス・キリストこそが真の救い主であるという確信を持ってくださって、これからも、私たちが感動を持って、この救い主であるイエス・キリストのことを崇めることができ、また、ますます自信を持って宣べ伝えるようになって行かれることを願います。

９：６**「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」**

ここで、預言者イザヤは、私たちに与えられる救い主の名前を四つあるいは五つ挙げています。特に、旧約の時代にあっては名前とは単なる呼称（＝他人と区別するための呼び名）などではなく、その人の生き方や特徴、またその人自身をも表わすということで、非常に大切なものと考えられていました。例えば、「信仰の父」と称されたアブラハムは、彼の元々の名は「アブラム」＝「高貴なる父、高められた父」の意でした。しかし、神がアブラハムに対して**「あなたの名は、もう、アブラムと呼んではならない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしが、あなたを多くの国民の父とするからである。」**（創世記１７：５）と言われた時から、彼の名前は「アブラム」ではなく「アブラハム」＝「多くの国民の父」の意になりました。それは、やがて、アブラハムがイスラエル民族の父となるだけでなく、アブラハムに倣った信仰によって、どの民族の者であっても救われる、そのような者たちの父になるということであったのです。

また、モーセもそうです。彼は、当時のエジプト王の命令によって、生まれてすぐに殺されなければならなかったはずなのに、生後３ヶ月になるまで隠して育てられましたが、とうとう隠しきれなくなり、「パピルス製のかご」（出エジプト記２：３）に入れられて、ナイル川に流されました。それを、エジプト王パロの娘に見付けられ、助けられました。そのパロの娘は、自分がナイル川の水の中から、この赤ん坊を引き出したということで、「引き出す」という意味の派生語である「モーセ」（出エジプト記２：１０）という名前を彼に付けるのです。しかし、モーセはただ単に、ナイル川から引き出されただけでなく、同胞であるイスラエルの民をエジプトの地から「引き出す」（＝奴隷の状態から救い出す）ために、神に用いられた人物でもありました。

このように、特に旧約の時代にあって、名前とは存在を区別するためだけのものではなく、その者がどのように生き、どのような働きをするのかということを明確にするためのものでもあったのです。

１．<u>不思議な助言者</u>

●この救い主とは私たちのカウンセラーである

まず、預言者イザヤが初めに教えることは、私たちのために与えられた救い主は**「不思議な助言者」**であるということを教えます。言い換えると、この救い主とは私たちのカウンセラーであると言うのです。実は、ここの箇所は「不思議な助言者」と訳すこともできますが、「不思議であり、助言者でもある」とも訳すことができます。ですから、先程、「救い主の名前を四つか五つ…」と言ったのですが、そのどちらを取っても、特に大きな違いはないと考えます。英語訳聖書では「Wonderful Counselor」と訳されています。この「助言者」ということばは、確かに私たちに必要な助言を与えてくれる存在であるという意味はもちろんですが、もう少し深い意味もあるのです。

実は、当時のパレスチナには王権を司る者にいつも「助言者」、あるいは「議官」という存在がいま

した。当時の助言者は、王にアドバイスする時に自分の知恵によってアドバイスするというよりも、神の知恵を求めて、神から与えられた知恵をもって王にアドバイスをしていたのです（Ｉ歴代誌２７：３２－３３、エズラ７：２８，８：２５、箴言２４：６）。つまり、みことばが教えるこの「助言者」という存在とは、王と民たちに対して神のみこころを伝えるような、また、王と神との間を仲介するような、そのような存在であったのです。イエスはまさしくそのような存在でした。①私たち人間に必要な数々の助言を与えてくださり、②私たちに父なる神のみこころを教えてくださいました。またそれだけでなく、③その神と私たち人間との仲介者にもなってくださいました。もし、イエスがいなかったら、いったい誰が、ここまで神のみこころを知ることができたでしょうか？私たちの誰一人、どれほど努力したところで自分の知識や学問では、決して神への理解、神のみこころを十分に知ることはできませんでした。Ｉコリント２：６－１６でもそのことが教えられています。特に２：１６に**「いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。」**とあります。このイエスが私たちのもとに来てくださったから、私たちは神のみこころを知ることができるようになったのです。神のみこころをご存じなのは、当然、神ご自身だけです。あなたをお造りになり、あなたにいのちを与えてくださっている、その神があなたにどのように生きるべきか、どう歩むことが神の前に正しいことなのかということを教えてくださるのです。

また、イエスは仲介者でもあられました。元々、神によって創造された人間にはそのような仲介者など必要ありませんでした。エデンの園でも自由に神と交わることができました。しかし、私たち人間が神に逆らった時に、罪ある者となったことによって、私たちと神との間には決して無視することのできない「罪」の問題が生まれたのです。イエスはこの神と私たちとの間にあった罪の問題を解決してくださる唯一の仲介者でもあったのです。そのことについては、もう少し後で見て行きましょう。

●その助言は時として不思議である。

イエスの与えてくださる助言は、時として、不思議なものでありました。それに対して、この世の教えは実用的であったり短絡的であったりします。つまり、「それを実行したら成果があった」とか、「こうやれば、うまく行く」といったものです。しかし、それが本当に神の前に正しく、喜ばれるものであるかというと、それは別問題です。たとえ、多くの人が喜ぶ結果になったからといって、神がそのことを喜んでおられるかどうかは別のことです。例えば、イスラエルの王制を民が願った時のことを考えてくだされば分かると思いますが、必ずしも、民の願ったことが最善であるとは限りません。私たちは、神によって造られ、神の目的のために生かされているが故に、その神に喜ばれているかどうかが最も大切なことです。

確かに、神の教えは時として不思議なものがあります。例えば、「山上の垂訓」です。ここで、イエスは、「心の貧しい者は幸いです」（マタイ５：３ａ）と言われましたが、どうして「心の貧しい者」が幸いなのでしょう？ここは、原語では、「霊において貧しい」といった意味のことばが使われていますが、本当ならば、そのような人たちのことを「幸いです」とは言いません。当時の人たちも、イエスの教えを聞いて驚いたはずです。しかし、イエスが教えてくださったことは、「自分の心の貧しさに気付いた者」のことです。つまり、自分を造り、いのちを与えてくださった本当の神のことを知り、その神の前に、いかに自分の心が醜く、愚かで、自分勝手であるかということに気付いた人こそが、「天の御国」に入ることができるということなのです。

また、こんなこともありました。マタイ１９章の記事ですが、ある青年がイエスのもとに来て、「永遠のいのちを得るためにはどうすれば良いのか」ということを尋ねました。イエスはその青年に対して、「神の前に正しい行ないをするように」と教えると、その青年は、「そういった教えはすべて守り行なっている」と言うのです。すると、イエスは「それが本当なら、自分の宝を売って、貧しい人たちに施すように」と言うのです。そうすると、その青年は悲しんで去っていったのです。その時、イエスが言われたのは、**「24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」**ということでした。それに対して、**「25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。『それでは、だれが救われることができるのでしょう。』」**とこのようなことがありました。当時は、裕福な人こそが神の祝福を頂いていると考えられていたのです。それなのに、イエスはそういった表面的なことではなく、真理を見抜いて全くそれと逆のことを教えられたのです。

確かに、ある時には、この神からの助言は奇異に思う時があるかも知れません。しかし、もし、あなたが唯一の神を信じ、その神が私たちに与えてくださったみことばが、この聖書だけであることを信じておられるなら、そこには、このみことばに従う以外の選択肢はないはずです。なぜなら、その神だけが、あなたに最適な助言を与えることのできる存在だからです。一見、そのイエスの教えやみことばは不思議で、なぜそれを実践するべきなのか、理解に苦しむ時があるかも知れません。しかし、

私たちが、神とそのみことばに信頼して歩む時、そこに神の祝福があるのです。

２．力ある神

私たちに与えられた救い主のお名前、その第２番目は「力ある神」です。

●この救い主は真の神である

みことばがはっきりと私たちに教えてくれているのは、この救い主とは真の神であるということです。このイザヤ９：６を見ただけでも、**「主権はその肩にあり」**とか、**「力ある神」**、**「永遠の父」**というような神にしか使われないような表現が続きます。実は、ここで「神」と訳されていることばですが、普通、神を表わす「~yhiloa/」（エローヒーム）ではなく、「lae」（エール）ということばが使われています。というのは、「~yhiloa/」（エローヒーム）の方は、文脈によっては、極まれに、人間を指したり（創世記６：２，出エジプト記２１：６，２２：８）、御使いを指したり（詩篇８：５，８２：１）することがあるからなのです。イザヤはここで、救い主とは、間違いなく神ご自身であると教えているのです。また、「主権」とは、最高の権威のことですが、旧約の人々（＝特に、ここではイザヤ）が、最高の権威がどこにあると考えていたのかということは明白です。例えば、同じイザヤ１４：２４でも**「万軍の主は誓って仰せられた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに成就する。」**とあります。この**「主権はその肩にある」**という表現は、当時の権威ある者たちが、肩にローブなどをまとっていたことを連想させるものです。

イエスこそは、創世記の初めから教えられている、すべてのものをお造りになられた唯一の神なのです。だから、新約聖書のコロサイ人への手紙でもこう教えられています。コロサイ１：１６－１７**「16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。 17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」**

●そのお方は全能者であられる

「イエスは神であられた」とそのように聖書のみことばははっきりと教えています。それ故に、イエスは全能者でもあられました。だから、その神ご自身が人となって、この地上に降りてきてくださって、何者も決してなり得なかった「神と人との仲介者」になることができたのです。Ｉテモテ２：５－６**「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。」**。また、ピリピ２：６－８**「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」**とある通りです。

このイザヤ９：６の前半、**「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり…」**という、このみことばはその神が何と人となられただけでなく、赤ちゃんとして、この地上に生まれて来られることをはっきりと預言しています。救い主とは、突然、現われるのでなければ、また、いきなり、「自分こそが神であり、救い主である！」などと吹聴するのでもなく、預言された赤ちゃんとしてお生まれになり、「男の子」として成長していくということをはっきりと、このみことばは教えているのです。時々、聖書の教えを使って、「自分こそがメシヤである！」などと主張する人物がいるように聞きますが、このような預言がなされ、生まれたその瞬間から、いや、生まれる前から救い主と考えられた人物は、イエス以外にはいません。このイエスだけが、私たちに与えられた真実の救い主なのです。

イエスは神であられるが故に、何者にも勝る力をお持ちでした。例えば、①サタンです。イエスはサタンに対しても勝利されました（マタイ４章）。また、イエスは、②ローマ兵たちが自分を捕らえに来た時も、多くの御使いたちを呼んで、彼らを滅ぼすことがおできになりました（マタイ２６：５３）。また、イエスは③死に対しても完全に勝利なさいました。その証拠が死からの復活です（ヨハネ２０章，Ｉコリント１５章など）。間違いなく、このイエスというお方は神であり全能者であられたのです。

３．永遠の父

私たちに与えられた救い主のお名前、その第３番目は「永遠の父」です。この当時のイスラエル人たちは、すべてをお造りになり、また、すべてをみこころのままになしておられる唯一の神のことを、「父」と呼んでいました。

●そのお方はあなたを顧みてくださる

なぜなら、イスラエル人たちはその神が自分たちを造ってくださっただけでなく、自分たちのことを顧みて、自分たちと特別な関係でいてくださっているということを知っていたからです。そのよう

なお方と自分たちとが特別な関係でいられることを、彼らは大きな「恵み」であり、「誇り」であると考えていたのです。祭司ザカリヤは、自分に子ども（＝先駆者バプテスマのヨハネ）が与えられ、いよいよ、救い主の誕生が近いことを知ってこのように賛美しました。ルカ１：６８－７０**「68　ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし、 69 救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に立てられた。 70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに。」**と。

救い主としてこの地上に来てくださったイエスは、皆さんを愛し、顧みてくださっているのです。だから、この地上に生まれてきて、私たちの「救い」のために「贖い」をなしてくださったのです。聖書の教える神とは、どこか遠い所におられて、私たちのことを冷ややかな目で見ておられるようなお方のではないのです。確かに、私たちとはかけ離れた聖さをお持ちですが、だからと言って、私たちを見下して、冷たいさばきを与えようとしておられるのではないのです。ここにおられる皆さんお一人お一人と親密な関係でいてくださるのです。

●そのお方は永遠にあなたと共にいてくださる。

もし、あなたがこの神をあなたの神と信じ従う決心をされるなら、そのあなたと神との関係は永遠に続くものとなります。なぜなら、神とは永遠の存在であり、その神を信じたあなたの永遠も約束されているからです。ヤコブ１：１７に**「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。父には移り変わりや、移り行く影はありません。」**とあります。そのような、変わることのない神であるから、神は私たちに約束してくださったように、永遠に、私たちと共にいてくださるのです。マタイ２８：２０にも「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」とある通りです。Ｉテサロニケ４：１７でも同じことが教えられています。**「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」**

４．平和の君

●このお方は和解（平和）をもたらされる

イエスは**「平和の君」**としてこの地上に来られました。今日のテキストの少し前、イザヤ９：４－５に、**「あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。」**とあります。イエスは武器を持たない赤ちゃんとして、平和をもたらす子どもとしてお生まれになってくださったのです。新約聖書にはこのような象徴的な場面があります。イエスは何に乗ってエルサレムに入城されたでしょう？それは「ロバ」でした（マタイ２１：１－１１）。イエスはあえてロバに乗ってエルサレムに入城されました。ロバ､それは平和の象徴であり、そして、その平和の象徴であるロバに乗って入城されるイエスは、人々に平和を、また、和解をもたらすために、私たちのところに来てくださったのです。間違いなくイエスは人々に「平和」を与えてくださいました。

先ずは、私たちと神との間の和解です。聖書はこう教えています。残念ながら、私たちと神とは敵対関係にあったと…。エペソ人への手紙で教えられているのは、私たち人間は**「生まれながら御怒りを受けるべき」**（エペソ２：３）存在であったということです。その問題を、イエスは自らのいのちを私たちの罪のための犠牲とすることによって解決してくださったのです。マタイ２０：２８**「人の子（＝イエス）が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」**とここで言われている、「贖い」とは、奴隷を解放するために支払われた金品のことです。イエスは私たちを「罪の奴隷」という状態から解放するために、自らのいのちを捧げてくださったのです。ローマ５：１０－１１にもある通り、イエスは文字通り和解をなしてくださったのです。**「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。 :11 それればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」**

●このお方は神の愛そのものである

ここで**「君」**と訳されていることばは、英語では「Prince」と訳されており、王子などを指すことばです。確かに、イエスは「その（神の）ひとり子」（ヨハネ３：１６）であられました。また、ヨハネはこう教えます。Ｉヨハネ４：８－９**「8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。 9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。」**、イエス･キリストは「神の愛」そのものでした。神はその大事なひと

り子イエス・キリストをお遣わしになったほどに、私たちを愛してくださったのです。

聖書はこのように教えます。ぶどう園に関するたとえ話でこのようなものがあります。マタイ２１：３６－４６**「もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。さて、収穫の時が近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりは袋だたきにし、もうひとりは殺し、もうひとりは石で打った。そこでもう一度、前よりももっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう。』と言って、息子を遣わした。すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。このばあい、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちをさして話しておられることに気づいた。それでイエスを捕えようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。」**、何と神の遣わしてくださった救い主のイエス･キリストを、私たち人間は磔にして殺してしまったのです。もちろん、そのことを神ははるか以前からご計画しておられ、イエスもご存じでした。

イエスはどのようにして和解をなすべきだと教えてくださったのでしょう？「武器に対しては武器で、憎しみに対しては憎しみを用いて和解をなし平和を作れ！」などと言われたでしょうか？また、「和解には、巧みな作戦・駆け引き・交渉術が必要だ！」と言われましたか？そうではありません。イエスは、マタイ５：４４ｂで**「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」**と言われました。十字架上では自分を磔にした者たちのために、**「『父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。』彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」**（ルカ２３：３４ｂ）と祈られたのです。イエスは武器や力ではなく、愛を用いて和解をなしてくださいました。神と私たちとの問題だけでなく、私たち人間どうしにも、愛によって和解する方法を教えてくださったのです。このイエスの愛があったから、イエスが自らのいのちを犠牲にしてくださったから、私たち人間の罪のために敵対していた神と私たちとが和解することができたのです。

クリスマスとは、こんなすばらしい救い主のお誕生を、また、神の恵みを感謝する時です。皆さんはいかがでしょうか？こんなすばらしい神を、救い主イエス･キリストを、心からの尊敬をもってほめたたえておられるでしょうか？また､そのような思いを､私たちは１年中持ち続けているでしょうか？毎年毎年、街中のクリスマスのデコレーションはエスカレートして行くことでしょう。しかし、私たちの神に対する感謝はどうでしょうか？皆さんのこの神に対する献身の思いは増し加わっているでしょうか？